



# スラシコ

和乃

璃瑚

私は孤独だった。

親がいないわけではない。特別裕福というわけではないものの、そこそこに恵まれた生活を送り、両親には大切に育てられてきた。

友人がいないわけでもない。学校へ行けばたくさんの人に声を掛けられるし、放課後や休日に一緒に過ごす仲間もいる。

それでも私は、孤独だった。



私の名前は望月晴海。『月を望む、晴れた海』なんて、なかなかオシャレで気に入っている。父の隆と母の奈美子は、いくつになっても仲がよく、天真爛漫な母と、それを優しく包み込む父と、明るくてよく笑う私は、『幸せな家庭』を絵に描いたような家族だった。

『だった』と過去形で言ってしまったが、今は不幸だというわけではない。たぶん周囲からは何ら変わりなく、幸せに見えていると思うし、実際幸せなんだろうと思う。ただ私の心が変わってしまっただけだ。

小さい頃から、私は周りの人に「かわいい」と誉められることが多かった。今、昔の写真を見ても、別段かわいいとは思えない。それなのにいつもそう言われていたのは、きっといつも笑っていたからだと思う。幼いなりに何となくそれが分かっていたのだろう、写真もビデオも、赤ちゃんの頃を除いては、笑顔の私しかいない。

自分が笑っていれば、皆が喜ぶ。それが嬉しくて、いつも私は笑っていた。いつも『いい子』でようとしていた。

そうやって成長してきた私は、いつしか自分の心を表現することができなくなっていった。悲しいことや辛いことがあっても、何でもないふりをして笑う。腹が立つことがあっても笑って許す。泣きたい気持ちのときも涙は見せない。

周りの友達からは、自分の感情をコントロールできる大人だと言われたりもした。でもそんなんじゃない。コントロールなんてしてない。ただ素直になることが怖いだけだ。笑わない私は嫌われるかもしれないと思うと、怖くて違う表現ができなかっただけだ。

本当は愚痴や悩みを話したかった。本当は怒りたかった。本当は、泣きたかった。

気が付けば、私は心の中に、とてつもない闇と、涙でできた氷を抱えていた。

「晴海！」

ゴールデンウィーク明けの火曜日、あくびをかみ殺しながら学校へ向かう途中で背中から声が掛かった。

振り向くと、同じクラスで1番仲のいい真由子が小走りにやって来た。

「おはよ」

いつもの通り、笑顔で言う。

「晴海はいつも爽やかねえ。私なんてダルくてしょうがないのに。連休中に夜更かししすぎちゃってさ」

私だってダルくてしょうがない。布団から出るのが嫌で、ズル休みしようかと思ったくらいだ。もちろんそんなこと、『いい子』の私にできるわけがない。布団の中でグズグズした分、大急ぎで着替えて、いつもの時間に朝食の席についたのだ。もちろん元気いっぱい。

そんな気持ちは心の奥に隠して、私は真由子に聞いた。

「どうしたの？ 何かゲームでもはまってんの？」

「違うのよ」

真由子は目の前で手を振りながら説明した。

「うちの近所のレンタルショップ、ほら、晴海も一緒に行ったことあるでしょ？」

「こないだ泊まりに行った時に、『タイタニック』借りたところ？」

「そうそう、あそこ。あの店でさ、この連休中はレンタルが半額だったのよ」

「半額？ すごいね！」

「でしょ？ 私もそう思って、こりゃ借りなきゃ損だって思ったわけよ」

「で、借りすぎちゃったってわけ？」

「ピンポ〜ン」

真由子は人差し指を立てて言った。

「見なきゃ見なきゃって思っ見て見るから、全然おもしろくないの。なら見るのやめようかとも思っただけど、それももったいないでしょ？ ま、どっちにしてももったいないんだけどね」

真由子は顔をしかめて苦笑いした。

真由子は表情がとても豊かだ。話をしながら、表情がクルクル変わる。笑ったり泣いたり怒ったり、時には変な顔をしてみたり。眺めているだけで飽きないくらいだ。

私はそんな真由子を、いつも羨ましいと思う。私には表情がない。いや、ひとつだけある。張り付いた笑顔だ。

「で？ 何を見たの？」

私はいつもの通りの笑顔で聞いた。

「えっとね……」

真由子は瞳をクルクル動かしながら考えた挙句、答えた。

「忘れちゃった」

「タイトルすら覚えてないの？」

思わず吹き出し、私たちは大笑いしながら学校の門をくぐった。

「従って、このXには五が当てはまる。するとYには……」

黒板にカツカツとチョークで書きながら、先生がしゃべっている。

——なんだって学校の授業っていうのは、こう退屈なんだろう。こんなこと勉強しても、大人になってから何の役にも立たないように思えるけど。

私は心の中でため息をつきながら、黒板の文字を熱心に書き写していく。

「分からないところはあるか？　ないなら次の例題にいくぞ」

先生が皆を見回しながら言う。チョークを手に、黒板の方を向いた途端、チャイムが鳴った。

なおも黒板に書こうとする先生を無視して、皆は次々と教科書やノートを鞆に入れていく。

「まったく、お前らはこういうことは手早いんだからな」

先生は半ば呆れたように笑いながら言った。

「今日やったところはちゃんと復習しておけよ」

もう誰も先生の声なんて聞いていなかった。先生は肩をすくめて私を見た。「まいったよ」とでも言うように。

そんな風に私を見られても困る。私だって本当はさっと片付けたいのだ。でも私は、愛想笑いをしながら会釈をした。

やっと1日の授業を終えたクラスメートたちは、ホームルームが終わったらすぐに帰れるように、荷物の準備や身だしなみのチェックを始めている。私も先にトイレを済ませておこうと廊下に出ると、ちょうど担任の五十嵐が歩いてくるところだった。しょうがない、トイレは後にしよう。両手に荷物を抱えている五十嵐のために、私はドアを開けた。

「お、サンキュ。望月はいつも気が利くな」

五十嵐は機嫌よく教室に入った。私も続いて席につく。

これまた退屈なホームルームが済むと、クラスメートたちは一斉に教室を飛び出した。クラブ活動をする人、遊びに行く人、塾へ向かう人、さまざまだ。

私がやっとトイレに行って戻ってくると、真由子がやってきた。

「晴海、一緒に帰ろ」

「うん」

2人で教室を出て靴を履き替えに行くと、同じクラスの舞と里菜がいた。2人は私と真由子を見つけると声を掛けてきた。

「ね、ね。今日まっすぐ帰んの？　今、カラオケにでも行こうって話してたんだけど、一緒に行かない？」

「そうだな……、私は別に用はないけど」

真由子は答えてから私に聞いた。

「晴海は？　用事とかある？」

「ううん、私も大丈夫」

本当は大丈夫じゃない。本当に用事はないのだけれど、カラオケはあまり好きじゃないのだ。どっちみち遊ぶなら、ショッピングや映画のほうがいいのに……。なのに私は答えてしまった。「うん、私も大丈夫」

ほんとに嫌になる。

「じゃあ決まり！ よし、盛り上がるぞ！」

舞と里菜は今にも走り出しそうなくらいにテンションが上がっている。

「ほんとにいいの？ 晴海、カラオケあんまり好きじゃないでしょ？ 私、適当に断ってあげようか？」

舞と里菜に聞こえないように、真由子はこっそり言った。私がカラオケがあまり好きではないことを真由子に言った覚えはないのだが、なんとなく気付いていたようだ。

「うん、いいの。たまにはね！」

私は明るく笑って答えた。

――なんで？ せっかく真由子が助け舟を出してくれたのに。

自分でも馬鹿だと思ったが、どうしようもなかった。だって1度OKしてしまったら、もう嫌とは言えない。そんなことをして、舞と里菜を怒らせても困るし、真由子に迷惑が掛かってはいけない。どうせ2時間かそこらの我慢だろう。腹をくくるしかない。

私は暗くなりそうな気持ちを振り払い、真由子の手を取った。

「行こ！」

「ただいま……」

私はヘトヘトになって帰宅した。

「おかえり！」

いつも元気な母の声が響いて、顔がのぞいた。

「遅かったのね」

「うん、ちょっと友達と」

「そう。もうすぐご飯できるわよ。着替えてらっしゃい」

母はそう言って台所に戻った。台所からはいい匂いが漂ってきている。カラオケでお菓子をつまんできたのに、急にお腹がすいてきた。

着替えてダイニングに入ると、父はもうテーブルについていた。父はサービス業だから平日が休みなのだ。

「ただいま」

父に声を掛けながら、私も席についた。

「おかえり。ちょうどいい時に帰ってきたな」

父はテーブルの上のお皿に鼻が付くくらいに近づけて、匂いを嗅いでいた。

父は母の作る料理が大好きだ。毎日毎日、母の手料理を食べているのに、飽きもせずに「おいしい、おいしい」と嬉しそうに食べる。

「美奈子の作る料理はほんとにおいしいな。一流料理店にも負けないくらいだよ」

「あら隆さん、それは言いすぎよ」

母はまんざらでもなさそうに答える。

「いつもおいしいって食べてくれるから、張り合いがあるわ」

私は日頃から感じていた疑問を母にぶつけてみた。

「お母さん、毎日お父さんに誉められてるのに、いつも嬉しそうだね。なんで？」

すると母は驚いたように答えた。

「そりゃ嬉しいわよ。一生懸命頑張って、それで誉められるんだもの。１日１００回誉められたって嬉しいわよ」

「１日１００回か。じゃあ俺ももっと誉めないとダメだなあ」

父はそう言って笑った。

バスタオルで髪を拭きながら自分の部屋に入ると、私は大きくため息をついた。

「疲れた」

私は声に出して言い、濡れた髪はそのままにして、ベッドに寝そべった。体力的に疲れたわけではない。精神的に疲れたのだ。毎日毎日、自分ではない誰かを演じているようだった。最近、それがどんどん辛くなっている。

母は誉められるのは嬉しいと言っていた。私も母のように毎日誰かに誉められるのに、ちっとも嬉しいとは思わない。それはなぜだろう。単に誉められることに慣れてしまったのだろうか。それとも他に何か理由があるのだろうか。私には分からない。私には.....。

気が付くと、いつの間にか眠っていたようだ。私は慌てて髪を乾かし、ベッドにもぐりこんだ。

目が覚めたら、また明日が始まる。『いい子』の１日が始まる。いつまで続くのか、いつになったら終るのか。そんなことを考えながら、私は眠りについた。

冬になっても、私は相変わらず『いい子』を演じ続けていた。当たり前だ。子供の頃からの習性を、そう簡単には変えられない。

私は、自己主張をしたいのにできない、そんなフラストレーションのかたまりのような日々を送っていた。

あいつに出会ったのは、そんな時だった。

冷たい空気が気持ちよく感じられるほどの上天気の日曜日、私は真由子とアメフトの試合に出掛けた。真由子の彼氏の勇は大学生で、アメリカンフットボール部に属している。

私はアメフトのことはまったく分からないのだが、今日の試合は優勝がかかった試合だからと真由子に誘われてやって来たのだ。

スタジアムに着くと、既に大勢の人が応援に詰めかけていた。なんとか自分たちの席を見つけた私たちは、そこに陣取り、試合直前の勇たちを眺めた。

「アメフトやってる人って、いかり肩の人ばっかなんだね」

私がおもしろそうに言うと、真由子は目を丸くして私を見つめ、ぷっと吹き出した。初めは、肩を揺らしながらも声を殺して笑っていたが、やがてこらえきれずに大声で笑い出した。

「な、何？ 真由子、どうしたの？」

私は、何事かとこちらをチラチラ見る周囲を気にしながら聞いた。真由子にはにじむ涙を拭きながら、私の耳に口を寄せ、小声で言った。

「あのね、晴海。あれは防具って言って、肩とかお尻とか、いろんなところを守るためにつけてるの。それくらい激しいスポーツだからね」

「えっ」

真由子の説明を聞いた私は、顔から火が出る思いだった。

「そ、そうなの？ 全然知らなかった」

「ごめん、ごめん。晴海、アメフトのこと何も知らないって言ってたもんね。ちゃんと説明しておけばよかったね」

そんなだから、当然、試合を見ているのも何がどうなっているのか、まったく分からない。真由子も初めは解説してくれていたのだが、試合が白熱してくるとほったらかしになってしまった。

周りが喜んでいたら、「ああ、得点したんだな」などと思いながら見ていたのだが、そんな私でもだんだん楽しくなってきた。目の前で繰り広げられる戦いに、訳が分からないまま、いつしか私も声を上げて応援していた。

「頑張れ！」

真由子は一瞬びっくりしたように私を見たが、すぐに嬉しそうに微笑み、負けじと大声を張り上げた。

「いけいけ！」

「やっつけちゃえ！」

私たちは肩を組んで応援した。心から勝利を願って。

『ピー！』

けたたましくホイッスルが鳴り響いた。

相変わらず何も分からない私は、何が起こったのかと戸惑ったが、一瞬の静寂の後、スタジアム全体が地響きのような歓声に包まれた。

「やった！ やったよ、晴海！ 優勝だよ！」

真由子が涙ぐみながら私に抱きついてきた。

真由子の肩越しにグラウンドを見ると、勇の周りには仲間たちが駆け寄り、ひとつのかたまりになっていた。私はそれを眺めながら、ゾクゾクするような感動を味わっていた。

「いらっしやいませ！」

店員の元気な声が響いた方へ顔を向けると、ちょうど勇とその友達らしき人が入ってきたところだった。試合の後、真由子と私は近くのファミレスで待っていたのだ。

「こっち、こっち」

真由子が合図すると、彼らは店員に手を挙げ、こちらにやってきた。

「お待たせ」

「ううん、お疲れ様。それより祝勝会とかなかったの？」

「うん、今日はゆっくり休んで明日するってことになってるから」

そう言って、彼らは席についた。

「とりあえず紹介するね」

真由子が私のことを説明している間、私は緊張して背筋を伸ばしていた。

「晴海ちゃんの話はよく聞いてるよ。よろしく」

「よろしく」

どんな話を聞いているのだろうかと気になりながら、私も頭を下げた。

「それからこいつは俺のチームメイトの丈」

勇は親指で、隣に座った男の人を指した。丈と呼ばれたその人は、ぶっきらぼうに会釈した。

「お前、もうちょっと愛想よくしろよ。女の子が目の前に2人もいるんだから」

丈が何も言わないので、勇は私たちの方に顔を向けた。

「こいつ、口も態度も悪いけど、根はいい奴なんだぜ」

勇がからかうように言うと、丈は口を歪めて言った。

「うるせえよ」

「ほんっとお前、シャイだよな」

勇は笑いながら首を振った。

飲み物が運ばれてきて、私たちはとりあえず乾杯することにした。

「優勝おめでとう！」

「ありがとう」

それから食事をしながら4人でしゃべっていたのだが、実質的にはほとんどが真由子と勇の会話を中心に進んでいた。私は2人の話に耳を傾け、終始笑顔で相槌を打っていたが、丈は話すことはもちろん、相づちすらほとんど打たなかった。私は丈の様子を見ていて、2人が気を悪くするのではないかとハラハラしていたが、当の2人は一向に気にする様子もなかった。

「いけない、もうこんな時間」

真由子が時計を見て声を上げた時には、もう10時になっていた。私も本当はずっと前に気になっていたのに言い出せないでいたので、真由子が言ってくれてほっとした。

店を出た私は当然ひとりで帰るつもりで、皆に挨拶をして歩き出した。すると勇が呼び止めた。

「あ、ちょっと待って。丈、送ってってやれよ」

「いえ、大丈夫です。ひとりで帰れますから」

私は慌てて手を振ったが、勇も真由子も反対した。

「もうこんな時間だし、危ないから」

「そうよ。晴海、送ってもらいなよ」

「でも……」

それでも私が躊躇していると、丈が「行くぞ」と歩き出した。

私が2人に手を振って慌てて後を追うと、丈が歩きながら言った。

「嘘くせえよな」

「え？」

私は何のことか分からず聞き返した。

「君の態度だよ。嘘で固めた感じがする。顔に印刷したような笑顔で相づち打ってさ、なんか無理してるって感じだよな」

いきなり核心を突かれた。

今日初めて会って、ほんの何時間か一緒にただけで、そんなことまでこの人には分かってしまったのだろうか。それとも真由子が気付いていて、勇と丈にそんな話をしたのだろうか。どっちにしても、あまりにストレートに指摘され、私は返す言葉を失っていた。

「何も言わないところを見ると、図星だな」

「そ、そんなことはありません」

私は慌てて否定した。

「私、真由子と勇くんがしゃべってるの聞いてて、ほんとに楽しかったもの。無理なんてしてないし、笑顔だって自然にでてきたんだから」

私がムキになって言い返していると、丈は薄く笑って言った。

「そんなにムキになんなよ」

「……」

丈はうーんと伸びをしながら言った。

「あんまり無理しない方がいいぜ。疲れるからさ」

私は何も言わず、早足で歩き出した。「待てよ」と言いながら丈が追いかけてこようとしたので、振り返りもせずに大きな声で言った。

「もうここでいいです。ありがとうございました」

言い終わるやいなや、私は全速力で走り出した。

丈の言葉は、私のど真ん中を突き刺した。それがあんまり痛くて、それ以上何か言うと泣いてしまいそうだったのだ。怒って言い返し、弱音を吐いて泣いてしまいそうだったのだ。

一分分かってる。自分でも無理してると思うし、それで疲れることなんて、分かりすぎるくらい分かってる。でも、それならどうしたらいいの？ どうしたらいいのよ！

私は冷たい空気で喉が痛くなるのも構わずに走り続けた。いつの間にか溢れ出した涙を拭うこともせずに。

翌日、私は重い足取りで学校に向かった。

昨夜の出来事は、きっと勇を通じて真由子に伝わっているだろう。真由子に深く追究されたらどうしようか、途中でひとりで帰ったことを責められたらどうしようかと考えながら歩いていると、後ろから肩を叩かれた。

「おっはよ！」

振り向くと真由子だった。いつもと変わらない真由子だった。

「昨日は遅くまでごめんね。ちゃんと丈くんに送ってもらった？」

「え？ あ、うん、大丈夫」

私は曖昧に答えた。

――まだ何も聞いてないのかな。でも今日中には聞くんだろうな。そうなったらどうしたらいいんだろ。

頭の中をぐるぐると駆け回る不安のせいで、お腹が痛くなってきた。

「どうしたの？ お腹痛いの？」

顔をしかめてお腹を押さえている私を見て、真由子が声を上げた。

「うん、ちょっと……」

「大変。保健室行こ」

「ううん、大丈夫よ。これくらい」

私は笑顔を作ってみせたが、真由子は私を強引に保健室に連れて行った。

「いいから。イガラシには私から言っというてあげるから」

私がベッドに横になると、真由子は人差し指を立てて言った。

「いい？ちゃんと寝てるのよ。休み時間にまた来るからね」

「真由子、なんだかお母さんみたい」

私が真由子の仕草をからかうと、真由子は肩をすくめて笑った。

「いつもは晴海に甘えてばっかなのにね」

「そんなこと……」

私が言いかけると、真由子が遮った。

「いけない！ ホームルーム始まっちゃう。じゃあね、ほんとにちゃんと寝てるのよ」

そう言うと、保健室を飛び出していった。

しんとなった保健室で、私はひとり呟いた。

「そんなことないよ、真由子。私の方が、ほんとは甘えてばっかなんだよ。私はいつも真由子に支えられてるんだよ。真由子が羨ましくて、真由子みたいになりたいくて、でもできないでいるんだよ」

自分が情けなくて、涙があとからあとから出た。カーテンで仕切られた小さな個室の中で、私は声を殺して泣き続けた。

チャイムが鳴って目が覚めた。いつの間にか眠っていたようだ。お腹の痛みはもう治っている。そろそろ教室に戻ろうか、もう少しここにしようかと考えていると、カーテンの向こうに人影が写った。

「晴海、起きてる？」

真由子が小さな声で呼びかけた。

「うん、今ちょうど起きた」

私がそう言うと、真由子はカーテンを開けて入ってきた。

「どう？ 調子は」

「うん、もう大丈夫だと思う」

「よかった。勇も心配してたよ。昨日試合見に来てもらって風邪でもひいちゃったかなって」

「勇くんが？」

私はまた不安になってきた。

「うん。さっきメールやりとりしててさ」

「また授業中にしてたの？ また携帯取り上げられちゃうよ」

心の中の不安を隠して、私は真由子を軽くにらんで言った。

「頭ではわかってるんだけど、つい、ね」

真由子は舌を出した。

「で、勇くん、何か言ってた？」

私が聞くと、真由子は不思議そうに聞き返した。

「何かって？」

「ううん、何もないればいいの」

私が首を振ると、真由子は思い出したように手を打った。

「あ、そう言えば」

私は胸がドクンと波打つのを感じた。体を硬くしながら聞く。

「何？」

「もうすぐクリスマスじゃない？ それでね、アメフトの仲間でクリスマスパーティするから、2人もおいでってさ」

予想外の答えに思わず笑いそうになりながらも、行けばまた丈と顔を合わすかも知れないと思うと、私は躊躇した。

「でも仲間とのパーティなのに、私たちが行ってもいいのかな」

「いいの、いいの。みんな彼女とか友達とか連れて来るんだって」

「そうなんだ……」

「そ。だからさ、予定ないなら行こうよ」

私はあまり気が進まなかったのだが、断る理由が思いつかなかったので頷いた。

「よし、決まり！　じゃ、連絡しておくね」

休み時間が終って、真由子は教室へ戻っていった。私ももう大丈夫だからと言ったのだが、真由子はそれを止めた。

「せっかくサボる理由があるんだから、サボらないと損だよ」

分かったような分からないような理屈だが、私は素直に従うことにした。少し考える時間が欲しかったのだ。授業を受けたところで、どうせろくに耳には入ってこないだろうし。

ひとりになると、私は天井を見上げながら考えた。

――本当に真由子は何も知らないのかな。知ってて知らないふりをしているのか、勇くんが真由子には黙ってるのか。それとも丈くんが何も言わなかったんだろうか。

考えたところで答えが出ないのは分かっていたが、私は考えずにいられなかった。

それから何事もなく数日が過ぎた。

やはり真由子は何も聞いていないようだった。私は不思議に思いながらも、ほっとしていた。それと同時に、丈が勇に話したのか、話したならどう話したのかが気になっていた。だから、勇のアメフト仲間のクリスマスパーティで丈と顔を合わすのが嫌なようないいような、複雑な気持ちだった。

真由子と店に入ると、驚いたことにかなりの人数が集まっていた。今夜は貸切にしているらしく、真ん中のテーブルに料理が並べられていて、あとのテーブルは端に寄せてあった。皆それぞれ、輪になってしゃべっている。サンタの格好をした人や、三角の帽子をかぶった人もいた。その間を抜けて、私たちは勇のところへ行った。

「お、来たな」

勇は私たちに気付いて手を上げた。

「こないだ大丈夫だった？　試合に誘って風邪ひかせちゃったみたいで申し訳なかったね」

勇がすまなさそうに言うので、私は慌てて目の前で手を振り、冗談めかして言った。

「いえ、風邪とかじゃなかったんです。ファミレスで何か悪いものでも食べたのかも」

「ははは。今日のは大丈夫だから、うんと食べてってよ」

勇が笑って言うと、真由子がすかさず言った。

「もちろんよ。私、お昼抜いてきたんだ。元はとらないとね」

「しっかりしてんな〜」

勇が呆れたように言い、私たちは声を上げて笑った。

「そろそろいいかな」

そう呟くと、勇はマイクを持って壇上に上がった。

「えー、皆さん」

たちまちざわめきが納まる。

「今日は我がチームのクリスマスパーティに参加してくださって、ありがとうございます。正直、こんなたくさんの人が集まるなんて、びっくりしています。みんな結構、暇なんだな」

会場から笑い声が起る。

「それではそろそろ乾杯をしたいと思いますので、グラスの用意を」

勇は会場を見回し、全員がグラスを手にしたのを確認して言った。

「思いっきり、楽しみましょう！ メリークリスマス！」

「メリークリスマス！」

あちこちでグラスの触れ合う音が聞こえ、賑やかな音楽が流れ始めた。

真由子が勇としゃべっている間、私は会場を見回したが、丈は来ていないようだった。少しがっかりした自分に気づき、私は小さく苦笑いした。

——なんでがっかりしてんのよ。気まずい思いせずに済んでよかったじゃない。

「晴海、どうしたの？ キョロキョロして」

「え？ ううん、ほんとにたくさんの人が来てるなって思って」

私はとっさにごまかした。真由子は気付いてないようだ。

「ほんとよね。あ、そういえば丈くんは来てないね」

真由子も会場を見回しながら言う。私は心の中を見透かされたかとドキッとしたが、今気付いたかのように平静を装って答えた。

「ほんとだ。こういうの、あんまり好きじゃないのかも」

「そうかもね」

真由子は頷いていたが、急にハッと息をのんだ。

「晴海、料理取りに行こ。早く食べないと、いいのなくなっちゃうよ」

ものすごく重要なことのように言い、真由子は私の手を引いた。

ようやくお腹が落ち着いてきて、私たちはデザートに手を出した。ケーキやフルーツをたっぷり皿に盛って中央のテーブルを離れると、勇がやってきた。

「どう？ ここの料理、うまいだろ」

「うん、すごく。食べ過ぎちゃった」

「どうやら元はとれたみたいだな」

私たちが笑っていると、勇が私たちの後ろを見て言った。

「お前、遅いよ」

誰だろうと振り返ると、丈が立っていた。

「悪い悪い。バイトが長引いてさ」

「もうあんまり料理残ってないぞ。こいつがほとんど食べたから」

勇が真由子を指すと、真由子は

「なによ、失礼ね。そんなことないわよ」

と、軽くにらみつけておいて、丈に顔を向けた。

「こんばんは」

真由子が明るく挨拶をする。

「こんばんは」

私も不自然のないように挨拶をする。

「ども」

丈も軽く会釈した。

そこへ、大きな声が飛んできた。

「おい、勇。早く紹介しろよ」

「あ、すぐ行きます」

勇はその声の主に答えておいて、真由子に言った。

「OBの先輩なんだけどさ、真由子を紹介しろってうるさいんだよ。ちょっといいか？」

「そうなの？ いいよ」

真由子は笑って言った。

「ごめんね、晴海。すぐ戻るから」

「丈、よろしくな」

2人が行ってしまっって、私と丈の間にぎこちない空気が流れた。何をしゃべればいいのか分からずに黙っていると、丈が口を開いた。

「こないだちゃんと帰れたか？」

「え？ あ、はい。すいませんでした、急に帰っちゃって」

「いや、それはいいけど」

また沈黙。

私は思い切って聞いてみた。

「こないだのこと……」

「え？」

「こないだのこと、勇くんに話してないんですか？」

「うん」

「どうして？」

「どうしてって……。話した方がよかった？」

私は慌てて首を振る。

「そういうわけじゃないけど」

「話す必要のないことだろ。それに男って、女の子みたいに、友達だから何でも話すってわけじゃないからな」

「……」

「けどあんな風に帰ったってことは、やっぱり図星だったんだろ」

「……」

丈の顔から視線を外して黙りこくっている私に、丈は諦めたように冷たく言い放った。

「ま、いいけど。俺にはどうせ関係のないことだからな」

突き放したような言い方にカチンときた私は、思わず言い返した。

「それなら初めから言わないでよ」

小さな声ではあったが、尖った口調で言った私に、丈は驚いたようだった。当然だろう、私自身が驚いていたのだから。今まで自分の思ったことをいつも隠してきた私が、こんな風に誰かに怒りをぶつけるなんて。それでもなぜか、言葉は止まらなかった。

「関係ないんだから、嘘っぽいとか無理してるとか、初めからそんなこと言わないでよ」

私は丈をにらみつけて言うと、コートを抱えて小走りに店を出た。

少し落ち着こうと、公園を見つけてブランコに座ると、真由子と勇に何も言わずに出てきたことが気になりだした。本当ならひと言掛けてから出てくるべきだったのだが、今日ばかりはどう頑張っても笑顔は作れなさそうだった。

せめて連絡だけでもと思い、私は真由子にメールを入れた。

『真由子、黙って帰っちゃってごめん。なんだか急に具合が悪くなってきちゃったの。真由子たち、話が盛り上がってるみたいだったから、そのまま帰って来たの。ごめんね。たいしたことはないから心配しないでね。勇くんにもよろしく言うておいてね。すごく楽しかったよ』

メールを送信すると、私は携帯を握り締めて泣いた。

——どうして私はいつまでもこうなの。こうやっていつもいつも、心地のいい嘘を並べて……

ひとしきり泣いて、ようやく気持ちも落ち着いてきた時、隣のブランコに誰かが座った。びっくりして隣を見ると、丈が前を向いたまま座っていた。

私が何も言えずに黙っていると、丈がずっと手を差し出した。

「どっちがいい」

丈の手には缶コーヒーと缶入りのお茶があった。私は黙ったまま、お茶を受け取った。両手で缶を包み込むようにして持つと、かじかんだ手がじんじんしてきた。丈は隣で黙ってコーヒーを飲んでいる。

手にしたお茶が随分ぬるくなった頃、丈がぼそっと言った。

「悪かったな」

「え？」

「言い過ぎた」

丈があまりにも素直に言うので、私はなんだか照れくさくなった。

「ううん、私もあんな風に怒っちゃって……」

私がぼそぼそ言っていると、丈がきっぱり言った。

「けどやっぱり、無理してるって思う」

「なによ、今謝ったばっかなのに」

私は丈をにらみつけたが、笑ってしまった。

——なんでだろ。丈くんには感情を出せる。さっきみたいに怒ったりもできる。丈くんがあまりにもズバズバ言う人だから、それにつられてるのかな。

私は自分でも不思議に思いながら話し出した。

「ほんとはね、自分でも分かったの。もうずっと前から、無理してるって気付いてた」

ブランコを揺らしながら話す私を、丈は黙って見ている。

「小さい頃から、私は『いい子』を演じ続けてきた。小さい頃はね、単に褒められるのが嬉しくて『いい子』をやってたの。いつも笑っていれば『かわいい』って言ってもらえたしね。だから、それはそれで楽しかった。でもいつ頃からか、だんだん苦痛になってきたの」

私は言葉を切って、もうすっかり冷たくなってしまったお茶を飲んだ。

「泣きたい時も怒りたい時も、弱音を吐きたい時もなまけたい時も、そんな気持ちは全部心の奥にしまって笑ってた。毎日辛くて、ひとりになるといつも泣いてたくらい。なのに自分で自分を変えることができなかった。誰かに嫌われるのが怖かったの」

私は長い息を吐いた。目の前に白い空気が広がる。

「……真由子ちゃんでも？ 真由子ちゃんにも、そういう気持ち、話せないのか？」

丈が聞いた。私は少し考えて「そうね」と答えた。

「変わらなきゃって思う。でもダメなの。どうしてもダメなの。怖いの」

そこまで話した時、どこかから声が掛かった。

「晴海」

私が驚いてキョロキョロしていると、後ろの茂みから真由子と勇が出てきた。

「真由子！ どうしてここに？」

「店から晴海が走るように出てって、丈くんも後から出てったから、何かあったのかと思ってついてきてみたの」

「そうなんだ」

「なんか途中で出てきにくくなっちゃって。ごめんね、盗み聞きみたいになって」

「ううん」

真由子と勇もブランコに座り、私たちはみんなして黙りこくっていた。

やがて意を決したように、真由子は私の方を向いて言った。

「晴海、今まで私の何を見てきたの？」

「え？」

「晴海が自分の気持ちに素直に怒ったり泣いたりしたからって、そんなことで私が晴海のことを嫌いになるとでも思ったの？」

真由子は私をまっすぐ見て言う。

「私たちって、その程度の友達だったの？ 晴海は私のこと、その程度にしか見てなかったの？」

真由子は怒ったように一気に言い、下を向いた。

「私、悲しいよ。無理してるの、何となく気付いてたんだ。でも私だけには、いつか本当の晴海を見せてくれるって信じてた。ずっと待ってたのに……」

真由子はポロポロと涙を落とした。

「真由子……」

「でも」真由子は鼻をすすって続けた。

「『真由子になら本当の自分を見せても大丈夫』って晴海に思わせることができなかったんだから、私の責任だよな」

「そんなこと！」

私は思わず大きな声で言った。

「そんなことないよ。私、真由子にならって思ってたよ。本当だよ。でもね、それをきっかけに、誰にでも……ってなった時のことを考えると怖かったの。真由子は大丈夫でも、他の人は私を嫌うかもしれないって思うと、やっぱり怖くて……」

私も一緒になって泣きながら言った。

すると、勇がぼつんと言った。

「ダメなのかな」

「え？」

私と真由子は勇を振り向いた。

「だってさ、この世の中、いろんな人がいるんだから、好かれたり嫌われたりして当然じゃないのかな。晴海ちゃんだって、好きな人もいれば嫌いな人もいるだろ？」

私は黙って頷いた。

「それが普通だよ。だから晴海ちゃんを嫌いな人がいたって当然の話なんだよ。逆に言えばさ、今の、本当の自分を出せないでいる晴海ちゃんを嫌いな人だっているかもしれないよ。それなら本当の自分を出して嫌われた方がよくないかな」

「そうだよ、晴海」

真由子も続ける。

「それにさ、晴海が本当の自分を出したからって、嫌われるとは思えないな。だって晴海は、今まで人のことを考えすぎて自分を出せなかったんでしょ。ならきっと、最低限のラインを考えた上で、本当の晴海を出せるはずだよ」

「そうそ。こいつみたいに愛想が悪すぎると敵を作るけどな」

勇が丈を指しながら笑って言った。

「なんだよ。俺をひきあいに出すなよ」

丈が口を尖らせて反論する。勇は丈の肩を叩きながら「まあまあ」となだめて笑った。

「けどさ」勇が真顔に戻って言う。

「こんな無愛想なヤツでも、俺はもちろんのこと、チームメイトもみんな分かってるんだ。こいつがどれだけいいヤツか、ちゃんと分かってるんだ」

丈を見ると、照れ隠しか、そっぽを向いていたが、少し嬉しそうに見えた。

「それがきっと本当の友達なんだね」

真由子が言う。

「もし、もしもよ。晴海が本当に自分を出して誰かに嫌われたとしても、私がいるじゃない。私はいつでも晴海の味方だよ。ううん、少なくとも今ここにいる３人は晴海の味方だよ。そうだよね」

真由子が勇と丈に問いかけると、勇は笑顔で大きく頷いた。丈が何も言わず、頷きもしないのを見て、勇がからかった。

「丈、お前も無理すんなよ。本当は晴海ちゃんのことを心配で心配でしょうがなかったくせに」

「バ、バカ！ お前、何言ってんだよ」

丈が珍しく慌てているのを見て、真由子は吹き出した。真由子が笑っている横で、私は小さく呟いた。

「そっか、それでいいんだ。すべての人に好かれなくてもいいんだ」

「そうよ。当たり前じゃん」

真由子が答える。私はもう１度、今度は大きな声で言った。

「それでいいんだ！」

目からウロコとはこのことだろうか。突然目の前が明るくなったようだった。どうして今までそんなことを思い悩んでいたのかと思うくらいだった。

「それでいいんだ！」

私はブランコに立ち上がり、思いっきりこいだ。

「それでいいんだ！」

真由子も叫びながら、ブランコに立ち上がる。

「ほら、2人もやろうよ。気持ちいいよ」

大きく揺らしながら、真由子が勇たちに言う。

「そうだ！ 靴飛ばししようよ」

真由子の言葉に丈と勇はほぼ同時に答えた。

「そんな子供みたいなこと……」

「お、いいな、やろうぜ！」

丈が信じられないと言うような表情で勇を見ると、もう既に勇は立ち上がりかけていた。

「マジかよ」

「つべこべ言っていないで、お前も早く立てよ」

「はいはい、分かりました」

丈は肩をすくめて苦笑いしながら立ち上がった。

私たちは何回も何回も靴を飛ばした。1番強かったのは、あんなに嫌がっていた丈だった。いつしか誰よりも楽しそうに靴を飛ばしているのに気付いて、私たちは大笑いした。丈も照れくさそうに頭をかきながら笑っていた。



「あれからもう1年たったんだね」

私は呟いた。真由子も勇も丈も、黙ってブランコに座っていた。

あの日、3人のお陰ですっかり吹っ切れた私は、次の日から人が変わったように、自分を出せるようになっていった。

先生にいい顔ばかりすることもなく、チャイムが鳴ればすぐに片付けたりもしたので、先生は驚いているようだった。

舞や里菜にカラオケに誘われても、うまく断るようになった。

「今日はカラオケの気分じゃないな。それよりさ、うちに来ない？ お母さん、喜んでケーキ焼いてくれるよ、きっと」

「ほんと？ 行く行く！」

すぐさま賛成した2人と真由子と私の4人で歩いていると、舞が言った。

「でもさ、最近晴海、変わったよね」

「あ、私も思った」里菜も同調する。

「今まではこんな風に違う意見を提案するなんてこと、なかったもんね」

「うん。今までは絶対賛成してくれてたじゃない？　けど何て言うか、本当かなって思う時があったの」

「なんか完璧すぎて、私たちとは違うところにいるような……。ね、晴海。何か心境の変化でもあったの？」

舞と里菜に聞かれて、私は真由子を見ながらいたずらっぽく笑った。

「なんでだろうね～」

「あ、何それ。絶対何かあったんだあ」

舞たちは突っ込んだが、私たちが笑うだけで答えないので、諦めて言った。

「ま、いいや、何があったかなんて。とにかくひとつ言えるのは、今の晴海はイケテルってことよ！」

舞が親指を立てた。

「ほんっと簡単なことを長い間悩んでたんだな、私」

私が呆れたように言うと、勇が言った。

「皆そうだよ、きっと。ひとりで悩んでるから答えが出ないだけで、誰かに話してみたら、案外すぐに答えが出るもんなんだよ」

「そのために友達や家族がいるってことなんだね」

私がそう言うと、真由子がニヤニヤしながら言った。

「彼氏もね」

私が微笑んで頷きながら丈を見ると、また丈はそっぽを向いていた。

「あ、丈ったら照れてんの？　あの時から私のこと好きだったくせに」

私がからかうと、丈は口を尖らせて慌てて言った。

「そんなことねえよ」

丈の慌てぶりがおかしくて、私たちは大笑いした。

「な、また靴飛ばししようぜ」

勇が半分立ち上がりながら言う。

「またかよ」

丈が顔をしかめて、でも少し笑いながら言う。

「よーし、今度は私が勝つからね」

「私だって負けないから」

私と真由子も立ち上がって、ブランコをこいだ。

頬に当たる冷たい風を心地よく感じながら、私たちはこぎ続けた。澄んだ空気に私たちの声が響き、青い空に4つの靴が飛んだ。

(完　結)